

# 北海鋼機 デザイン アワード NEWS

6th-vol.3

北海鋼機デザインアワード NEWS  
は、本アワードの審査会の様子などをレポートするものです  
発行:北海鋼機デザインアワード事務局

## 二次審査（現地審査）

2023年11月5日（日）～6日（月）  
会場：

### 現地審査（訪問順）

- 1日目 HOUSE03 - 盤溪の家（札幌市）  
銀斜壁の境界（札幌市）  
夏の家（余市町）  
Gentō（倶知安町）
- 2日目 芽室町役場（芽室町）  
最終選考（公社）日本建築家協会（JIA）北海道支部

### 参加者：

- 審査委員長**  
松島潤平  
【北海道大学大学院工学研究院准教授】
- 審査委員**  
村田利道  
【北海鋼機株式会社代表取締役社長】  
小西彦仁  
【（公社）日本建築家協会（JIA）北海道支部長】  
川島隆司  
【北海道板金工業組合理事長】  
横尾淳一  
【（株）竹中工務店】  
植田暁  
【NPO法人景観ネットワーク代表理事】
- 事務局**  
弘田亨一  
【北海鋼機デザインアワード事務局  
実行委員長／（公社）日本建築家協会（JIA）北海道支部】  
小倉寛征  
【（公社）日本建築家協会（JIA）北海道支部】  
原口佳己  
【北海鋼機株式会社】  
佐藤正人  
【北海鋼機株式会社】  
石川美帆  
【北海鋼機株式会社】
- 記録**  
登尾未佳

## 二次審査を終え、受賞作決まる！

第6回北海鋼機デザインアワードの受賞作品が決定しました。審査委員長に北海道大学准教授の松島潤平氏を迎えた今回は、新たにテーマとして「鉄がつくるこれからの原風景」を掲げ、審査基準も一部リニューアル。

2023年10月10日に行われた一次審査を通過した5作品を冬直前の同年11月5日～6日、道内各地を駆け抜けるように訪問し、現地審査と最終選考からなる二次審査が執り行われました。

その結果を以下にお知らせします。

続いて、審査委員長をはじめとする審査総評、さらに全審査委員からの受賞作品ごとの選評を審査時の写真とともにお伝えいたします。

### ●受賞は最優秀賞1作品、優秀賞2作品、入賞2作品に決定

2日間にわたった二次審査。1日目は札幌市内で2作品、余市町へ移動して1作品、さらに倶知安町へ移動して1作品を、2日目は芽室町の1作品を訪問して行われました。設計者および審査員がそれぞれの建物・空間を巡りなら、プレゼンテーションおよび質疑・応答がなされました。2日目の現地審査後には札幌へ戻り、最終選考会が開かれました。審査委員一人2票を投じる投票からスタートし、その結果を受けて本格的な審議に移りました。現地確認によって、書類審査からは諮れなかった改めての評価や意見が出され、中でも今回のテーマにある「これからの原風景」を主要な評点として、作品ごとに論証していく丁寧な議論が重ねられました。そして厳正な審議の結果、最優秀賞に1作品、優秀賞に2作品が選定され、2作品が入賞となりました。詳しくは下記の通りです。受賞者のみなさん、おめでとうございます！

### 二次審査結果

#### ●最優秀賞（1作品）

作品名 HOUSE03 - 盤溪の家  
設計者 佐藤 圭、三木 万裕子

#### ●優秀賞（2作品）

作品名 芽室町役場  
設計者 加藤 誠、池村 奈々、太田 豊

作品名 Gentō

設計者 須藤 朋之、山脇 ももよ

#### ●入賞（2作品）

作品名 銀斜壁の境界  
設計者 高野 現太、山脇 克彦

作品名 夏の家

設計者 久野 浩志

### ●審査委員長のからの審査総評

審査委員長 松島 潤平

今回で6回目となる本アワードでは、「鉄がつくるこれからの原風景」というテーマを新たに掲げ、人・場所・条件によって多様に異なる鉄・板金のマテリアリティに基づいた今後の北海道の原風景を展望する契機とさせていただきます。ご応募いただいた21作品は手法、解釈、思想、様々な観点において発見的要素がみられる力作揃いで、審査は困難を極めました。素晴らしい知見を与えてくれるものばかりでした。主催者と審査委員を代表して、応募者の皆様と応募を承諾いただいた建主の皆様へ深く感謝申し上げます。

設計者の信念に裏打ちされた建築の佇まいは、とても凛々しい。今回現地審査で訪れた入賞作品は、どちらもこの感覚が共通していたように思います。設計者が鋼材の力を信頼し、鉄という揺れ動くマテリアリティを、揺るぎない信念で用いていました。「風景」という言葉を使うと、周囲に馴染む控え目な建ち姿を想像しがちですが、「これからの原風景」をつくるであろうと感じられるものは、むしろ周囲に対し屹立ち、既存の事物を再定義する力を持つものであると感じました。

そのなかで特に興味深かったことが、『盤溪の家』のコンセプトを語る「ダニング」という言葉です。手法としては「プリコラーージュ」や「エレメンタリズム」等、近いものは存在していたと思いますが、縫製技術の言語を援用することで、これまでの建築的言語では掬い上げることのできなかった「繕い」という要素を孕んだ設計や風景への価値観が瑞々しく発掘されるような感覚を得ました。

この「繕い」という価値観で刷新される建築や風景の姿は、果たして新しいのか？それとも古いのか？ある種の異形として建ち現れ、これまでの文脈を裏切る側面を持ちながら、これまでの文脈が無ければ絶対に成立し得ない風景。「いま」だからこそ、「そこ」だからこそ可能な、特別な風景。その“現代”を超越した“現在”性に「これからの原風景」の姿が垣間見えました。2次審査では様々な評価が飛び交いましたが、今後も周辺環境と建築が絶えず変容しながら緊張関係を築いていき、常に“現在”の姿であり続けるであろう『盤溪の家』に最優秀賞を与えることで意見は一致しました。

こうした観点において、『芽室町役場』も住民の“いま”と寄り添い続けるであろう大きな包容力と変容力が存分に感じられるものであり、『Gentō』も日々表情を変えながらも不変の存在感を放つ羊蹄山とともにある現在性を組み込んだ建築であるという評価から、この2作品を優秀賞に選出しました。『銀斜壁の家』、『夏の家』もユニークな建築図式、ユニークな鋼材の使い方により特別な風景を享受・創出するものとして高く評価すべき作品であるという意見が交わされました。

これからこのアワードが回を重ねていくなかで、今回の入賞作品にみられる設計手法や鋼材使用の試みが定着し、幅広く展開され、北海道の風景が刷新されていくさまを継続して見届けていきたいと思っています。改めて皆様にとっても、建築の金属表現を通してこれからの北海道の原風景を考える機会になったならば幸いです。



## 各賞選評

さらに今回は、審査委員 4 名からも審査全体を通しての総評やコメントが寄せられましたので、以下に紹介します。

## ●審査委員から寄せられた総評・コメント

審査委員 村田 利道

今回応募があった 21 作品はどれもテーマをよく表現した素晴らしい作品であり、選考において非常に悩みました。2 次選考での現地審査では、書面審査では気づかなかった設計者(施主)の熱い想いもつたわり、また現地で北海道の自然・風景と建物の一体感や内部の空間設計への隅々までの細かい配慮などを知ることができ、ますます賞の選定を悩ますものでした。

鉄という素材の持っている可能性を存分に引き出す工夫や挑戦がなされており、まさしく「鉄がつくるこれからの原風景」になっていく作品でありました。

審査委員 小西 彦仁

今回のデザイン賞に与えられた「鉄がつくるこれからの原風景」という指標は、応募する参加者に対して大変良いガイドラインとなった。作品は多種多様で作者がそれぞれに周辺環境と作品がどのように融合し、あるいは対峙させたかのコンセプトが語られていた。ここに選ばれた 5 作品は其中でも特に鉄という素材の表現がキッチリと浮き出ており生活や周辺環境まで取り込む強さを持ち合わせていた。

審査委員 横尾 淳一

応募作品を見させていただき、都市または自然の中におかれた建築による新しい風景が、いままさに作られようとしていると感じられました。そのなかで入選の 5 作品は北海道らしい、ある方向性を指し示しているように思われました。

審査委員 植田 暁

いずれの応募作品も金属の特性を主題とした固有の世界観を有しており、急速に変化している北海道の原風景が向かう先はひとつではないと予見できた。慎重な検討と充実した議論を経た末、コモンとなる原風景から私的で体験的な原風景まで、あるいは従来の価値を継承しつつ現代的な評価を重ねる原風景から新たに生まれる原風景まで、多様性の時代らしい審査結果となった。入賞以上となった作品たちの金属表現の広がりや融和した、これからの原風景の誕生を期待したい。

ここからは、最優秀賞(1 作品)、優秀賞(2 作品)、入賞(2 作品)の 5 作品について、受賞作品ごとに各審査員による選評を現地審査の様子を伝える写真と併せて紹介します。

## 《審査委員による選評 最優秀賞(1 作品)》

## HOUSE03 - 盤溪の家

佐藤 圭・三木 万裕子

— 審査委員長 松島 潤平 —

減築したことを一言で物語る、唐突な角度でバッサリと切り取られた断面に大波のガルバリウム鋼板を当て込んだ建ち姿は、紛れもなく異形であった。しかし同時に、ダーニングという縫製技術になぞらえた多様な素材が混在する縞の表情は、盤溪という溢れる自然の要素でコラージュされた里山の風景を凝縮しているようでもあった。なんとなく選んだ物など一つもないであろう、適材適所の検討が丁寧に重ねられたこの建築の箇所に、毅然と鋼板が用いられている。その事実、鋼板がもつ確かな価値と信頼性が強く垣間見える。

— 審査委員 村田 利道 —

築 50 年の廃墟を自主施工による改修で大自然とそとで生活してきた歴史を残しつつ、ガルバリウム鋼板による大波葺き屋根が厳しい北海道の冬景色にも調和できる力強さを表現できています。「鉄がつくってきた原風景を残しながら自然のなかでたくましく生活していく鉄がつくるこれからの原風景」といえる今回のテーマをまさしく具現化した作品です。

— 審査委員 小西 彦仁 —

札幌市郊外の山の中にこの住宅は建っている。作者自らの住宅であるが、古い住宅を買い取りそれを切り貼りしながら自分達の空間にしている、正面ファサードに貼られた大波のガルバリウムの壁が迎えてくれた。素地の鈍い銀色は周辺の風景や光により表情を変える大型のレフレクターのようでもある。そのファサードはいわば生活と自然を分ける皮膜であり、結界でもあるように感じた。わずか 0.35 mm に託された意味は大きく、作者の感覚の良さを評価した。

— 審査委員 川島 隆司 —

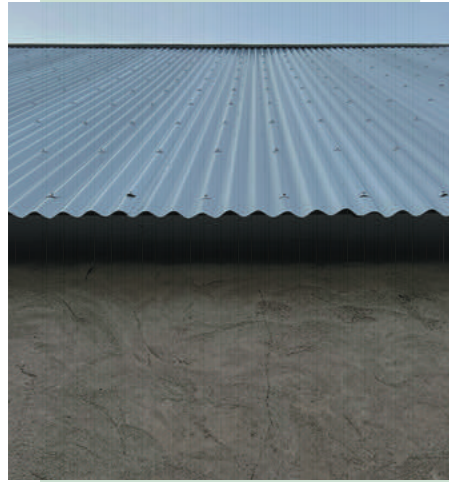
改修工事というのは、古いものを新しくするものであるという固定観念を持っていたが、この作品は修繕に修繕を重ねながらも、元の素材を残した外観を保ち、最初に目に飛び込む大きな屋根は、ガルバリウム鋼板の大波を施すことで周辺の古くからある建物とのバランスを保っていると感じた。まだ完成形ではないとのことなので、この先どの様な改修がされていくのか楽しみであると感じた。

— 審査委員 横尾 淳一 —

既存建物というひとつの歴史を尊重しつつ、必要に応じて手を加えたことで、無駄のない



## 各賞選評 (つづき)



かたちになっています。耐候性に優れかつ加工性の良い鋼板の特徴を生かし、ライフスタイルや建物用途の変化に応じたかたちを実現しています。原風景とは、人をとりかこむ自然と建築により連綿と続く、常にあたらしい状態のことなのかもしれないと思いました。

— 審査委員 植田 暁 —

北海道全域で散見できるような家屋を大胆に減築した作品である。大波のガルバリウム鋼板で覆った大屋根をはじめ、随所に見られる工夫を凝らした改修部分からは、建築創作の原点である作る喜びを感じた。さらに北海道でしばしば見るかのような、一見アノニマスな装いの改修を「ダージング」と呼ぶ手法として再定義したことにも着目したい。気づかぬうちに生じてしまう原風景の変化を、建築家の職域に引き寄せ、新たな表現の機会として提案した点こそ評価に値する。



鋼板を外装だけでなく、内装の天井にもスパンドレルとして採用するなど新たな試みや工夫をしつつ、木材素材との一体感を感じられる素晴らしい作品です。経年して街と一体となって表情が変わっていくことも楽しめることでしょう。

— 審査委員 小西 彦仁 —

十勝平野のほぼ中央にある町の庁舎であり、農業が産んだ町と言っても過言ではない。作者は周辺に建つ農業用の施設が銀色であることに着目して、いわば町の色と捉えてこの庁舎も少し鈍く銀色に塗装されたガルバリウムで外装を覆った。外装は大きさの違う2段の箱が2層目から浮き、一階フロアはピロティー化され街に開放されている。その浮いた箱の底、一階天井も銀色のガルバリウムが貼られ空に浮く姿は町との境界を無くし、周辺と一体化されていてその周到さを評価した。

— 審査委員 川島 隆司 —

一次産業の盛んな十勝地方は古くから板金が施されている建物が多く、この作品も外壁に板金を使用し、異なる形状の製品を組み合わせず同じ形状の製品で仕上げたことにより正方形の建物を美しく見せ、公共の建物らしく仕上がっていると感じた。内部は職員の方々が働いている姿が見渡せる開放的な作りで、町民の方々との距離が近く訪れやすい役場だと感じた。

— 審査委員 横尾 淳一 —

プランとインテリアが一体となってまちに開かれており、熟練した設計者の力が随所にちりばめられた、完成度の高い作品となっています。計画の意図通りに町民が使いこなしており、建築により創られたアクティビティが、街並みの風景を造りだしていました。

— 審査委員 植田 暁 —

町民を四方から迎える透明感の高い地上階と、宙に浮いたかのような2つの直方体、その間に挟まれたヴォイドを交互に積み重ねた構成の作品である。周囲に建ち並ぶ農業用倉庫などに町役場の姿を融和させようという意図し、開口部の少ない直方体をガルバリウム鋼板で包んだという。引用という素振りを見せながらも、幾何学形態の複合体として整えた本作品の抽象的な表現を通じて、北海道の農業地域に点在する巨大で工場のような施設群によって変容しつつある原風景が向かうべき新たな調和を確信し牽引している点を評価したい。

## 《 審査委員による選評 優秀賞 (2作品) 》

## 芽室町役場

加藤 誠・池村 奈々・太田 豊

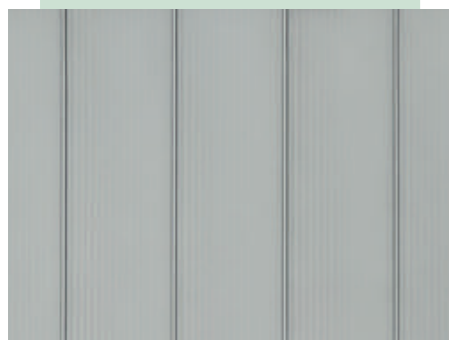
— 審査委員長 松島 潤平 —

農業倉庫というコンテキスト、外部の光や色の映り込み等、ガルバリウム鋼板が持つ意味的效果と物理的效果の両面を存分に発揮させつつ、全体は町役場として地域の背景となることに徹するような汎用材の慎重な深さでパッケージされた正しき建築。その一方で、内部に貫入するスパンドレル天井にみる実験的な空間のダイナミズムに、これからの新たなまちの風景をつくっていく一歩の踏込の気概も感じられて嬉しい。

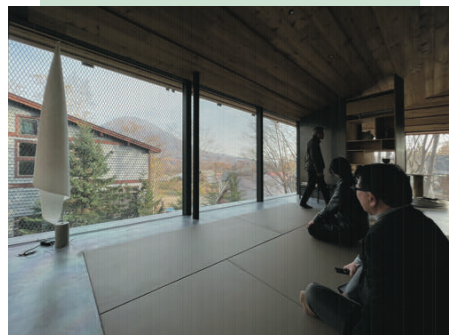
— 審査委員 村田 利道 —

役場庁舎として、町民のみなさんにオープンで隅々まで人の動線が配慮された温かみのある空間として作り上げられています。現地審査当日も町民のみなさんが本当に心地よく利用されていることを見学できました。

建物としても「農業のまち芽室」の町全体の景観と適合させたシルバー色のガルバリウム



## 各賞選評 (つづき)



## Gentō

須藤 朋之・山脇 ももよ

## — 審査委員長 松島 潤平 —

黒皮鋼板がもつエキゾチックなエッセンスを用いて、海外の人が見れば日本的であり、日本人が見れば海外的であるという、絶妙なバランスでつくられた建築。メタルメッシュの効果は存外に大きく、季節や時間帯でフィルタの濃度が変化し、時に雪や葉も絡まりながら周辺環境との距離感が適切にチューニングされるだろう。一見スタティックな佇まいに見えるが、ニセコという地域自体がもつ異文化の交錯を体現するように、移ろい揺れ動く不定の美しさを纏っている。

## — 審査委員 村田 利道 —

カラーガルバリウム鋼板の屋根の傾斜を羊蹄山にマッチングさせてニセコの大自の風景に溶け込み北海道を象徴するような鉄の原風景といえる作品です。黒皮鋼板、リン酸亜鉛処理鋼板、エキスパンドメタルなどを外装や内装に木材とうまく調和させてスタイリッシュモダンのなかに和のテイストを感じさせる落ち着きと躍動感を兼ね備えた質感をもつ空間が表現できています。設計者とオーナーが織りなす世界観が国内外すべてのゲストにマッチする作品です。

## — 審査委員 小西 彦仁 —

大きな方形屋根が斜面地にフワッと浮かんでいた。比羅夫のリゾート地で計画された外国人の別荘のはなれであった。浮かんだ屋根の真ん中に平面を二分する壁が横切っている。その仕上げとして黒皮鉄板やリン酸処理鋼板が外から内へと貫入されていた。またアプローチには雁木ならぬドブ付のエキスパンドメタルがレースカーテンのように張られていた。シンプルな手法で効率よく空間を金属製素材で分節し、その壁が羊蹄山へと視線を導くなど手法を評価した。

## — 審査委員 川島 隆司 —

周辺に大きな別荘ばかりが建ち並ぶ中に、縁側のある平家の日本家屋を思わせる佇まいで、周辺には見られない方形の屋根も羊蹄山と重なり美しく、冬にはすっぽりと雪に覆われた建物の中に入っていき感じが「かまくら」を思わせ、室内からはメッシュに雪が付着し、木々に雪が積もる景色が広がる。雪深いニセコの冬を意識した美しい建物であると感じた。

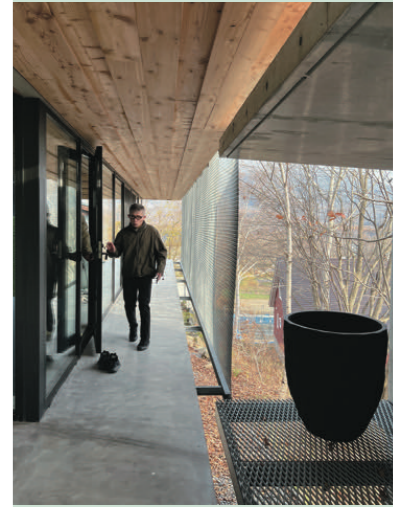
## — 審査委員 横尾 淳一 —

春夏秋冬を丁寧に観察し、調和をこえた自然と一体の建築を造ることで、ここでしか成しえない新しい風景を生み出しています。スチールの力強さを前面に出した表現は、世界に誇るリゾート地にふさわしく、最優秀作品とともに北海道の多様な風景を提示していると感じました。

## — 審査委員 植田 暁 —

アプローチから見えるのは、深い庇を持つ寄棟の平屋のような傾斜地に建つ作品である。極めて透明感の高い上階を黒皮鋼板の壁が斜めに突き抜け、住み手の背後を守っている。

日本の原風景を国際的な造形言語に置き換えた表現の巧みさもさることながら、回廊状のテラスを囲むエキスパンドメタルと鋼板の壁に挟まれた生活空間は、うつろう人の気持ちに合わせて屋内外の領域感を変化させられる。自然環境から眺望を切り離さずに、体験的な原風景の器を生み出した点を評価したい。



## 《 審査委員による選評 入賞 (2作品) 》

## 銀斜壁の境界

高野 現太・山脇 克彦

## — 審査委員長 松島 潤平 —

ガルバリウム鋼板素地をレフ板のように扱い、その鈍い反射像の重層のなかに暮らすという大胆な発想でつくられた住宅。暮らしてから住宅像を描くのではなく、空間的イメージから暮らしを描く試みは住宅設計の手法として非常に興味深い。風景を最大限享受する装置として十分に機能していると感じる一方で、この建築の試みが周囲に何かしらの風景を提供するものでもあってほしいとも思う。

## — 審査委員 村田 利道 —

個人の住宅として設計者と施主との信頼関係のなかでつくりあげた個性的なデザインと眺望を最大限活かし、V字にスリットした屋根からの採光をガルバリウム素地に当ててやさしく変化する調光を楽しむなど独自の工夫のなかで周辺との外観の調和と住むものにとって心地よい空間を両立させています。四季、昼夜、日々の天候による変化を外からも家のなかでも楽しむことができます。家づくりのこだわりとそれを実現していく楽しさを感じることができる作品です。

## — 審査委員 小西 彦仁 —

札幌市を一望する斜面にこの住宅はあった。素地のガルバリウム縦平貼りで覆われており全面道路側と隣家側の開口部は制御され一つだけクレパス状に切り込まれた開口部が存在している。中に入ると外部の斜壁は2階のLDK部分にそのまま斜め壁として入り込み仕上げとして外壁と同材が使用されていた。内外と連続する壁が生活空間をつくり心地よさを醸し出している秀作であった。



## 各賞選評（つづき）

## 6th HK DESIGN AWARD



## — 審査委員 川島 隆司 —

外壁と同じ立ハゼ葺きの銀斜壁を内壁に施しているのが目新しく感じた。室内には様々な形状で異なる角度から外光が入るよう工夫され、いくつもの空間が入り組んで存在している。また、そこから見える自然の景色と市街地の眺望は素晴らしかった。あらゆるところに多用されている板金も丁寧に仕事され、納め方にも拘った仕上がりとなっている。

## — 審査委員 横尾 淳一 —

板金の特性を把握した細やかなディテール表現が随所に見られました。間接光をガルバリウム素地に当てるライティングにより、硬さのない柔らかな室内空間となっています。

## — 審査委員 植田 暁 —

眺望の良い敷地に建つ、上階に家族が集い食卓を囲むワンルーム、下階に個室や水回りをコンパクトにまとめた作品である。内部に傾斜して住み手の生活を包み込む壁の素材を外部と同じガルバリウム鋼板とし、大工、サッシ、家具工事で精緻に取り合うことにより優しさのある素材として手懐け、光を蓄えるかのように鈍く反射する面としての魅力を生み出した。上階から臨む外の眺めを際立たせつつ、落ち着きを演出するこの壁は、住み手の豊かな原風景をかたちづくるに違いない。



### 夏の家

久野 浩志

## — 審査委員長 松島 潤平 —

余市湾のなかの入れ子の小湾のようにセットされた、フラクタルな形状を持つ建築。ボリュームから延長して描かれる立体フェンスの補助線により、本来の囲み線である敷地境界は極めて曖昧な状態へと掻き消される。強い海風が資本主義の所有概念を吹き飛ばし、どこまでが自分の土地かわからない。自らの敷地を余市湾に差し出しているようでもあり、余市湾を独占しているようでもある。「誰のものでもない風景」が「誰のものでもある風景」となるとき、原風景は創出されるのかもしれない。

## — 審査委員 村田 利道 —

余市の素晴らしい海岸風景を最大限プライベートで楽しめるように回りの環境から切り離す建物の設計がされています。また、フェンスとして採用した溶融亜鉛めっき被覆の溶接金網が空と海のブルーと山や広場のグリーンを遮ることなく、解放感ある空間を生み出し



て自然な風の流れることができる工夫がされています。今後、網フェンスに植物が覆っていく楽しみもあります。

## — 審査委員 小西 彦仁 —

余市湾の砂浜に接した敷地はおおらかな海と広々とした空が待っていた。その環境を抱擁するように三日月状に曲げられた空間とその軌道に連続する細い丸鋼のお手製フェンスは海側に向かい徐々に低くなっていく。夏には藁が絡まり緑の壁になるという。自然と一体となり風景とシンクロするあり様は、このミニマムな空間が最大限に拡張されることを予見した作者の眼力によるところであると感じた。

## — 審査委員 川島 隆司 —

国道側からは、この建物はいったい何だろうと思わせるが、海側に回ると建物とドッグランの金網のフェンスが卵型に繋がっており、海に面した壁は一面ガラス張りになっている。そこから見るドッグランとフェンス越しの風景は北海道の短い夏を楽しむ最高の景色で、こんな別荘があったら夏は楽しいだろうと感じた。

## — 審査委員 横尾 淳一 —

外部への閉じ方と開き方、季節限定の利用など、明快なプログラムがストレートに表現されており、すがすがしさを感じました。フェンスと植栽が絡んでゆき、自然と一体化したこれからの風景が楽しい建物です。

## — 審査委員 植田 暁 —

高さを抑えた円環状の建築で、海と国道に挟まれて建つ。屋内空間は小振りで、二重の溶融亜鉛鍍金のフェンスが占める割合が高い作品である。その佇まいは、塀を作ってこなかった北海道の住宅地の原風景を継承したかのようだが、この建築を雄大なロケーションと一体化させている立役者は、インスタレーションのようでもあり、塀のようでもある、敷地境界からいささか引きのあるフェンスである。敷地の9割以上の面積をコモンのように見せるこの作品が提示するのは、原風景の一部を成す単体の建築の在り方である。

受賞者の皆さん、誠におめでとうございます。本アワードの表彰式は2024年5月（JIA北海道支部総会）に行われる予定です。

なお、次回アワードの開催は2年後を予定しています。また多くの皆さまより、鉄を使用した意欲ある作品に出合えることを願っております。



北海道鋼機デザインアワード  
共催：北海道鋼機株式会社  
(公社)日本建築家協会(JIA)  
北海道支部  
後援：北海道板金工業組合

